

## 山本芳翠氏の逸事

(黒田清輝畫伯談)

洋畫界の先達として大家として斯界に著名なりし山本芳翠氏は十五日午後四時頃遽に腦溢血を起し豫ねて揮毫中の觀音の繪を書きかけ乍ら畫筆を手にしたる儘死去したり享年五十七歳十八日を以て埋葬の式を取り營みたるが氏の斯界に於ける功績及び閱歷性行等に就ては世に傳ふべきもの尠ならず白馬會の畫伯黒田清輝氏の氏に關する談話はよく氏の一生を盡すものなれば以下に記載すべし

▲知り合の初め 私が芳翠君と知合ひになつたのは佛蘭西に居つた時である、君は繪畫研究の爲明治十一年に佛蘭西へ留學して丁度明治二十年に歸朝した、私が佛蘭西に往つたのは十七年で芳翠氏とは公使館などでチラホラ顔を合せる許り年の上からも大分相違があり先づ交際などはしなかつた尤も其頃の私の佛蘭西留學は決して繪畫の研究の爲めではない、法律を研究する目的で普通學の學校で普通學を修めて居つたが當時公使館の書記生で私の保證人であつた橋口某と云ふ人の許へ私が好く遊びに往き慰みに繪を書いて壁へ張つて來たのを君は何時か見たのだらう「此人を繪書きにしたならば相應な畫工になると橋口や其の他の人にも話した、歸朝後も故の佐久間貞一氏や或は、私の親のところに来て「是非黒田を繪書きにしたい」と頻りに奨めた、併し其頃の私は他方面に野心を懷いて居たので君の門下になつて畫を修行する考へなどは少しも起らなんだが君の餘りの熱心から遂其の野心を打棄て繪畫を研究する考へになつた

▲阿母さん 私が日本へ歸つて來たのは二十七年で其頃君は櫻田本郷町に廣大な畫室を構へて居つたが其後他へ引越して其處は櫻田俱樂部となる私は君の後を承けて君が引立てた佛蘭西派の學生を引受けた、間もなく戦争になる、君が從軍する、旅順口陥落の頃になつて私も戰場へ往く事となり新聞記者の宿舍で一緒になつたが其時の山本君は「阿母さん」と云ふ綽名で從軍記者仲間に非常な評判なものであつた、何故「阿母さん」と云ふかと云ふに君は色々な藝に達して居る中、殊に料理が非常に巧みだ、所が當時の戦争は今回とは違ひ始めての外國との戦争で糧食が非常に不自由だ、威海衛總攻撃の前に橋頭聚出發の際などは糧食は勝手にせよとの命令で一同大いに困つた、すると山本君は平生の伎倆を振つて饅頭粉で鹽の汁を作り實に旨い御馳走をした爲めに大喝采、つまらぬ材料で旨く料理を拵へる、旨い料理で御馳走をするので「阿母さん」夫れに對照して「大阪朝日」の天重皓と云ふ人が「阿父さん」と云はれたが此人は死んだ、君の料理に旨かつた他の一つの例がある、君の佛蘭西に居た時一人の婆を使つて居つたが君は器用に日本料理を拵へて好く客を呼ぶ、君の畫室は殆んど其當時の日本の貴顯紳士で外國に來た人の集會所と云つた有様がある、夫れで其の婆さんも何時か君の日本料理を覺えて了つて飯や、鮎、刺身何でも出来るやうになつたなど云ふ話もある、此外君の多藝な事は驚くべきものであつた。

『日本』明治三十九年二月九日